

中
2021

国

語

始める前に左の注意事項を読みなさい。

- 始めの合図があるまで開いてはいけません。
- 問題は全部で21ページあります。
- 答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 問題冊子、解答用紙のいずれにも受験番号、氏名を書きなさい。
- 質問のあるときは静かに手をあげ先生の指示を待ちなさい。
- 終わりの合図があったら、ただちに筆記用具を置きなさい。
- 問題冊子を持ち帰ってはいけません。

(第3回)

受験番号	
氏	名
	ふりがな

【一】 次の【A】・【B】は、中島らも『お父さんのバックドロップ』の一節です。プロレスが大嫌いな小学生の「カズオ（下田くん）」は、悪役レスラーになった父の「牛之助」のことを、恥ずかしく思っていました。そのような中、友だちの「タケル」が家に遊びに来た時に、父親の職業が知られてしまいます。本文は、それに続く場面です。それぞれの文章を読んで、後の問に答えなさい。

【A】

「あの、へんなことを聞いていいですか？」

「だめだ。へんなこと聞いたらバックドロップかけるぞ。」

牛之助はそういつてタケルをにらんでから、目を糸のように細くしてわらい、じょうだんだよ、といった。

「ぼくのお父さんがですね、プロレスってのは、その……」

「注八百長だって、いうんだろ？」

「え……ええ。」

「ぼく、ちょっとこっちへきて、おれの腹にさわってみろ。」

タケルは近づいて、牛之助がさしだしたおなかをこわごわさわってみた。^①それはふつくらまるい外観とはちがつて、石のようにかたかった。

「おもいつきりなぐってみろ。」

「え？ でも……」

「いいから、なぐってみろ。」

タケルはいわれるままに大きなモーションをとると、全身の力をこめて、そのおなかをなぐってみた。とたん

にセメントのかべでもなぐったような手ごたえがあつて、うで全体にじーんとしびれがきた。

「しびれたろう。毎日バットでひっぱたいてもらつて、きたえてるからな。うでだつて、ほら、見てみる。」

と、牛之助はゆかたのそでをまくつて、力こぶをつくつてみせた。それはおとなの男の人のどうまわりくらいあつた。

「ベンチプレスといつてな、バーベルをあげるんだが、おれは二百キロので練習してる。」

「二百キロ……」

タケルは息をのんだ。

「な？ 人間じゃねえんだ。怪物だよ、怪物。そんなのが本気出しあつて戦つたらどうなる？ 殺しあいだよ。

それをやらないのを八百長だつていうんなら、八百長だわさ、たしかに。」

すっかり感心したタケルは、ことばをうしなつて、牛之助の首すじにもりあがつた筋肉を見つめていた。

それとは対照的に、下田くんのほうはずつと無口で、どちらかといえば、お父さんから目をそらせているような感じがあつた。(中略)

タケルが牛之助のすがたを見たのは、それから一週間後のやはり日曜日のことだった。

その日、タケルはお父さんと映画を見たあとで、駅の近くのファミリールレストランにつれていってもらつた。好物のエビフライを口に運ぼうとしたところで、うしろのほうから、

「なんだと、もう一度いってみろ！」

という大声が聞こえた。びっくりしてフォークをおき、ふりかえつて見ると、うしろにおかれたゴムの木の葉っぱごしに、牛之助と下田くんのすがたが見えた。

牛之助はこわい顔で下田くんをにらんでいる。が、下田くんも負けずにお父さんをにらみかえしている。

「もう一度いえばいいんだね。② ぼくはお父さんを尊敬していない。そうだったんだよ。」

「それが、自分の父親に対していうことばだと思うのか、え？」

「親だから尊敬しろっていうのはりくつになっていないよ。尊敬できる親と、そうでない親とがある。それがあたりまえなんじゃない？」

「ほう、じゃ、聞くが、おまえは、おれのどこがそんなに尊敬できないんだ。」

「どこがって……。どこを尊敬しろっていうんだよ。」

「なにをっ!？」

③ 四十三歳になつて、(注)みどり色の霧をふいたり、くさりがまをふりまわしたりしている父親のどこを尊敬するのさ。」

「おまえ、おれがああいうことを、本気でよろこんでやってると思ってるのか。」

「いいえ。ぼくはそんなに幼稚じゃないよ。お父さんは商売だから、ああいうことをやっているんでしょ？」

「そうだ。考えてみる。たとえばギャング映画をつくるのにな、出る役者みんながみんな、善玉の役をやりた
いといいましたら、どうなる？ 映画ができないだろう。お客さんが楽しんで見てくれるものにするためには、
そういう、そんな役まわりをする人間が必要なんだ。」

「そうだね。」

「おまえのいつている小学校だつて、そうだろう。花のせわをする当番の子もいれば、便所そうじの当番にあたる子もいるんじゃないのか。」

「そうだね。」

「世の中なんて、みんなそれぞれの役割でなりたつんだ。便所そうじをさぼつて、花の当番ばかりしたがるやつ

がすきか？」

「いや。」

「^④みんな自分の役割をはたすために、つらい思いもするんだ。おれが毎日毎日バットで腹をなぐらせたり、砲丸を腹の上に落とさせたりしてきたのはなんのためだと思う？」

「強くなるためでしょ？」

「すこしちがう。トレーニングをするのはな、〈ケガをしない〉ためだ。」

「……………」

「おれたちの商売はな、一年で二百回も試合をして旅をするんだ。ケガをしてしまったら、それでもうめしの食いあげだ。それにお客さんにも会社にもめいわくがかかる。だから、なぐられても、けられてもケガをしないようにきたえるんだ。」

「ふうん。」

「どうだ。これでもおれのことを尊敬できないか。」

「できない。」

「なに？」

「だって、お父さんは、オリンピックにまで出たアマチュアレスリングの選手だったんでしょ？」

「そうだ。」

「じゃ、どうしてそのスポーツの世界で、コーチになるなりして、つづけなかったの？」

「それは……………」

「かわりにいってあげようか。ほんとのスポーツの世界には、ほんとの勝ち負けがあるからなんだ。」

「……………」

「お父さんは、そのほんとうの勝ち負けのある世界に、ずっといるのがこわかったんだ。だから、みどり色の霧をふいていけば、どっちが強いかわからない世界へにげたんだ。だから、尊敬できない。」

「カズオ……」

「ぼくはそうやって、花の当番ばかりしているお父さんみたいにはなりたくない。ぼくはぼくで、ちゃんとにげられない勝ち負けのある世界へいくよ。体を使ってじゃなくて、頭を使ってだけ。だから勉強するんだ。」

「カズオ……」

「ぼく、先に帰ってるよ。」

下田くんはそういうと、すっと席を立って、おもての自動ドアから出ていった。

⑤あとにひとりのこされた牛之助は、目のまえにおかれた半分食べかけのハンバーグのさらを、それが冷えきってしまふまで、じつと見つめつづけていた。

タケルはそのさびしそうなすがたを見ると、なんだかなみだが出てきそうになったので、あわてて目をそらせた。

お父さんが、トーストをかじりながら新聞を読んで、お母さんにしかられている。

タケルの家の、いつもの朝の光景だ。

そのお父さんの読んでいる新聞がめくらられて、タケルの目のまえにスポーツ面がきた。なにげなくその面を見ていたタケルは、おもわず「アッ」と声をあげてしまった。

「なんだ、へんな声を出して。」

お父さんが新聞ごしにタケルを見る。

「下田くんのお父さんだ。牛之助おじさんが……」

そのスポーツ面には、なかほどにかなり大きな見出しで、

「世界空手チャンピオン・クマ殺しのカーマンに、プロレスラーが挑戦」

と書かれていた。

タケルは、お父さんの新聞をひったくるようにとると、その記事を^④むさぼるように読んだ。

【B】

テレビの画面に、超満員の国技館がうつしだされていた。

リングの中央に、クマ殺しのカーマンと下田牛之助が立っている。いま、日本とアメリカのそれぞれの国歌の吹奏がおわったところである。

タケルと下田くんは、^①食^②い^③いる^④よう^⑤な^⑥ま^⑦な^⑧ざ^⑨し^⑩で、画面を見つめていた。下田くんのお母さんは、もうテレビを見る勇気がなくて、和室の間にひきこもって、仏だんにむかってなにやらとなえている。下田くんもへんに意地をはって、国技館にお父さんを見にいこうとはしなかったのだ。

リングの上では、アナウンサーがマイクでボブ・カーマンの名前をコールした。満場から、^①わ^②れる^③よう^④な^⑤拍^⑥手がわきおこった。

カーマンはガウンをぬぎすてると、両手を高くあげて歓声にこたえた。二メートルの長身が、一グラムのぜい肉もないひきしまった筋肉をまもって、黒光りしている。

つぎにアナウンサーが、下田牛之助の名をコールした。とたんに会場から、

「霧をふけ！」

というヤジが聞こえた。④ わらいがおこる。

牛之助は、いつものほでなコスチュームではなくて、アマチュアレシングのウェアに身をつつんでいる。いつもならあれくるうはずのところなのだが、きょうは静かな目で会場を見わたした。そしてアナウンサーのほうに歩みよると、マイクを貸してくれ、という身ぶりをしてみせた。意外な展開に、会場が⑤ しずまりかえった。

マイクを手にした牛之助は、低いしゃがれた声でしゃべりはじめた。

「みんな、聞いてくれ。おれは、いまから空手とやる。」

ワーツと拍手がおこった。牛之助はそれを手で制して、さらにしゃべった。

「正直にいつてやろうか。おれは……こわい。ひざがガクガクするくらいにこわい。負けるのがこわい。死ぬかもしれない。しかし、もっとこわいのは、きょうかぎり、もう二度とリングに立てないのじゃないか、ということだ。」

会場がザワザワした。

⑥ おれはこのリングに立つのが大すぎだった。二十何年間というもの、あしたはもうリングに立てないんじゃないかと、そればかり考えてきた。それがこわくて、毎日めちやくちやに体をきたえてきた。でもな、もういんだ。おれがここで勝つても負けても、あんたたちはすぐに、おれのことなんかわすれるだろう。むかし、空手と試合をしてボロボロになった、なんとかというばかなレスラーがいた、くらしい話で、それもすぐにわすれてしまう。それもいい。きょう、おれがここで戦うのは、たった三人の人間のためだ。その三人さえおれのことをわすれずにいてくれたら、それでいい。そのために戦う。それはおれ自身と、おれのカーちゃん、おれのム

スコだ。」

そこまでいうと牛之助がマイクを返し、f まわりに一礼した。われるような拍手と同時に、ゴングが鳴った。

【語注】

1 八百長

……

勝負事に見せかけて、前もって勝敗を打ち合わせておき、うわべだけの勝負をすること。

2 みどり色の霧をふいたり

……

「牛之助」は、反則技であるこうした行為を、プロレスの試合でよく行っていた。

問一 ―― 部①「それはふつくらまるい外観とはちがって、石のようにかたかった」とありますが、この部分と同様に、「牛之助」のおなかのかたさを表現した一文を、【A】の本文中から探し、はじめの五字をぬき出して答えなさい。

問二 ―― 部②「ぼくはお父さんを尊敬していない」について、次の問いに答えなさい。

〈I〉「カズオ」が「牛之助」を尊敬していないのは、なぜですか。その理由としてもつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 牛之助は、みどり色の霧をふいて、くさがりがまをふりまわす自分こそが、本来の自分の姿だと思っているが、本当は、強くたくましい姿を隠しているだけだと、カズオは思っているから。

イ 牛之助は、家族のために厳しい練習に耐え、日々努力していると思っっているが、息子から見るとそれは自己満足であり、家族を思いやっていない行為であると、カズオは思っているから。

ウ 牛之助は、悪役レスラーをすることで、そんな役まわりを引き受けていると言っているが、実際には、本当の勝ち負けがある厳しい世界から逃げているだけだと、カズオは思っているから。

エ 牛之助は、奇怪な行為によって観客を魅了する自分の姿に、誇りを持っているが、悪役レスラーを商売にしている父親の姿を、恥ずかしくみつもめないものだと、カズオは思っているから。

〈II〉「カズオ」は尊敬していない父親のことを、比喩(たとえ)を用いてどのように表現していますか。【A】の本文中から、十五字以内でぬき出して答えなさい。

問三

——部③「四十三歳になって、みどり色の霧をふいたり、くさがりがまをふりまわしたりしている」とありますが、「牛之助」がこのようなことをするのは、何のためですか。【A】の本文中の「牛之助」のセリフの中から二〇字程度で探し、はじめの五字をぬき出して答えなさい。

問四

——部④「みんな自分の役割をはたすために、つらい思いもするんだ」とありますが、「牛之助」がつらい思いをしながら練習を続けてきたのは、なぜですか。その理由としてもつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア プロレスの世界では、肉体的にも精神的にも強くなるだけではなく、アマチュアレスリングの選手として勝利を重ね、名声を得なければならないから。

イ プロレスの世界では、世界一の選手を目指して強くなるだけではなく、最年長の選手として試合を行えるように、強い体を作らなければならないから。

ウ プロレスの世界では、観客を喜ばせ、レスラーを続けるだけではなく、トレーニングをすることで、世界大会で活躍できる選手になる必要があるから。

エ プロレスの世界では、観客の期待に応え、強い選手として多数の人に認められるだけではなく、ケガをしない体を維持していかなければならないから。

問五

——部⑤「あとにひとりのこされた牛之助は、目のまえにおかれた半分食べかけのハンバーグのさらを、それが冷えきってしまうまで、じっと見つめつづけていた」という表現について、本文を読んだ四人の生徒が、授業で感想を述べ合っています。これについて、問いに答えなさい。

ゆうき 本文みたいに自分の息子から、尊敬してないってはっきりと言われてしまったら、ほんとうに

ショックだろうなあ……。

ななみ そうだね。【A】の本文は、⑧の視点から親子の姿が描写されていて、この「牛之助」につ

いての一文も、⑨が見た「牛之助」の姿が具体的に説明されているね。

みさき この一文では、「牛之助」の姿だけではなく、彼が食べていた「ハンバーグ」についても描写しながら、「冷えきってしまうまで」という説明を付け加えることで、⑩もうまく表現されていると思うよ。

ひろと 小説ではこの部分のように、登場人物の様子や心情が、ものや風景の描写によって、間接的に表現されることが多くあるように思うなあ。

〈I〉⑪に入るもつとも適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア カズオ イ 牛之助 ウ タケル エ カーマン

〔Ⅱ〕〔Y〕に入るもつとも適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 時間が経過したこと イ 動きが生まれたこと
ウ 心情が変化したこと エ 場面が転換したこと

問六

——部①「むさぼるように」・②「食いているような」・③「われるような」の本文中における意味としてもつともふさわしいものを、次の各群から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

① むさぼるように

- ア 人を押し退けて乱暴に イ 慌てないでじっくりと
ウ 夢中になってひたすら エ 周囲を気にせず強引に

② 食いているような

- ア 目をそらさずじつと見る イ 人にわりこみながら見る
ウ 細かな点に注目して見る エ 画面に顔を近づけて見る

③ われるような

- ア 音が鋭く響き渡る イ 音が非常に大きい
ウ 音が二重に伝わる エ 音が様々に変わる

問七

㉔

㉕

に入るもつとも適当な語を次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア ぐらつと イ シーンと ウ どつと エ ガランと オ ふかぶかと

問八

【A】の本文もふまえると、――部⑥「おれはこのリングに立つのが大すぎだった」以降のセリフで、「牛之助」はどのようなことを伝えていきますか。その説明としてもつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 今までは、トレーニングを積みながら、試合で勝つことを最優先に考えてきたが、自分の苦勞が家族に伝わっていないことを知ったため、たとえ負ける可能性が高くても、強い相手と対戦しようと思つたということ。

イ これまでは、体を維持しながら、家族のために試合を続けてきたが、思い通りにできていない現状を息子に指摘されたため、あこがれであった相手と試合を行い、自分がしたいことを実践しようと思つたということ。

ウ 今までは、リングに立てない日がやってくることを恐れ、練習に打ち込むことで気持ちをごまかしてきたが、自分が納得できることが一番であると気付いたため、無理に試合を続けなくてもよいと思つたということ。

エ これまでは、ケガをしないように練習にも耐え、誇りをもって取り組んできたが、自分の息子から尊敬されていないことが分かったため、強い相手に挑戦することで、家族に真剣な姿を見せたいと思つたということ。

二 次の詩を読み、後の問に答えなさい。

悲しみ

石垣りん

私は六十五歳です。

このあいだ転んで

右の手首を骨折しました。

なおつても元のようにはならない

と病院で言われ

① 腕をさすつて泣きました。

お父さんお母さんごめんなさい。

二人とも、とつくに死んでいませんが

二人にもらった身体です。

今も私は子供です。

② おばあさんではありません。

問一 — 部①「腕をさすって泣きました。」とあるが、この詩の人物はなぜ泣いたのか、もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 手首を骨折して、涙がでるほど痛かったから。

イ 右の手首が若いころのように戻らないと言われたから。

ウ 父母にもらった大事な身体を傷つけてしまったから。

エ 骨折をして、亡くなった父母を思い出したから。

問二 — 部②「おばあさんではありません。」とあるが、これはどういうことか、もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 両親を亡くしてはいても、自分自身はまだまだ若く、たとえ転んで怪我をしても気持ちの上では年寄りではなく、子供であるということ。

イ 年をとってうっかりと転んでしまったけれども、気持ちの上でも身体的にも子供のように若々しく過ごしていこうということ。

ウ 転んで怪我をしてしまい、そのことを悲しむ両親を見ると、六十五歳だからといって自分を年寄りだとは思ってはいけないということ。

エ 年をとって身体は弱り、転んで怪我もしてしまったけれど、両親のことを思うと私はいつまでもあなたたちの子供なんだと思っっているということ。

問三 この詩の形式としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 文語定型詩
- イ 文語自由詩
- ウ 口語定型詩
- エ 口語自由詩

問四 この詩は、何連からなっていますか。漢数字で記しなさい。

三 次の俳句と短歌について、後の問に答えなさい。

- A 菜の花や月は東に日は西に
B 降る雪や明治は遠くなりけり
C 花の色は移りにけりな(注1)いたづらにわが身世にふるながめせしまに
D 死に近き母に添寝(そいね)のしんしんと遠田の(注2)かはづ天に聞こゆる

【語注】

- 1 いたづらに(いたづらに) …… むだに
2 かはづ(かわず) …… カエル

問一 Aの句から季語を抜き出しなさい。

問二 Bの句の「や」や「けり」を俳句の用語で何というか、三字で記しなさい。

問三 Cで歌われている季節はいつか、漢字一字で記しなさい。

問四

Dの歌の一般的な解釈は、「臨終が迫った母親のそばで寝ていると、夜は更けて静まりかえるなか、遠くの水田で鳴くカエルの声が天空に響いて聞こえるようだ」ということだが、この歌について四人の中学生の感想を紹介する。このなかで明らかに間違っているものはどれか、一つ選び、記号で答えなさい。

ア この歌は、死にゆく母と、鳴き声を天に響かせるカエルの生命力との対比が描かれていると思う。

イ 騒がしいカエルの声を聞きながら、母の死を落ち着いて受け止めようとする作者の冷静さが強調されていると思う。

ウ 愛する母親の死とは無関係に、カエルが鳴き騒ぎ、時が流れ、季節が変わってゆく無情さを感じ取れると思う。

エ 母の死を覚悟した作者の静かな落ち着きと、カエルの騒がしさが対比されていると思う。

問五

ABCの作品を古い順に並べると、どうなるか、正しいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア A↓B↓C

イ C↓A↓B

ウ A↓C↓B

エ C↓B↓A

四 次の文の（ ）にもっともふさわしい語句をそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

① 教室で生徒が担任の先生に

「先生を明日、職員室にお訪ねすると母が（ ）。」
と告げた。

ア おっしゃっております

イ お話していました

ウ おっしゃられなさいました

エ 申しております

② 担任の先生が生徒に

「では、お母さまには、午前十時に（ ）と伝えてください。」
と返答した。

ア お訪ね申し上げるよう

イ いらっしゃいませ

ウ お越しくささい

エ お行きなさい

③ 野球観戦をしていて

「あの選手が平凡な外野フライを落球するとは（ ）だなあ。」
と兄が嘆いた。

ア 馬の耳に念仏

イ 猿も木から落ちる

ウ 猫に小判

エ 弱い犬ほどよくほえる

④ 知人が主催するパーティーに招かれて、

「こんな私が行っても仕方がないけれど、出かけることにしよう。」
と父が語った。

（と言うしな。」

ア ちりも積もれば山となる

イ 貧乏ひまなし

ウ 枯れ木も山のにぎわい

エ 割れなべにとじぶた

⑤ 雑誌の読者プレゼントに応募した姉は

「毎日、（ ）の思いで、知らせが来るのを待っているわ。」
と言った。

ア 一朝一夕

イ 一触即発

ウ 一喜一憂

エ 一日千秋

五

次の——部のカタカナを漢字で記しなさい。

- ① 彼女は絵画を描くことにタグいまれな才能を示した。
- ② 検査で消化キカンの病気が発見された。
- ③ 彼はいつもコウジョウ心をもって、努力している。
- ④ 親子の間で世代のダンゼツを感じる。
- ⑤ 局面がなかなかダカイできずに困った。

六

次の——部の漢字の読みをひらがなで記しなさい。

- ① 古いけれども美しい家屋が並ぶ街並みが好きだった。
- ② 組織を刷新するために力を尽くした。
- ③ 病気の発作が短時間でおさまって、ほっとした。
- ④ 最後は運命に身を委ねるしかないと思った。
- ⑤ 学校では金銭の貸借をいつさい禁止している。

